

地域認識の抽出方法と得られる認識の特性に関する基礎的研究

5214D031-8 西村 奏絵[※]

Kanae Nishimura

本研究では、地域認識の抽出方法と得られる認識の傾向や特性を明らかにすることを目的とし、地域認識に関する既存研究の動向把握と、特定の地域における具体的な方法による認識の特性把握を行った。研究レビューより、地域認識は領域、風景、地域資源、印象の 4 つに大別でき、4 つの抽出媒体と 11 の抽出手法による抽出方法を提示した。また、具体的な対象地における地域認識の抽出として岐阜県恵那市を対象にワークショップとインタビューにより抽出された認識の特性から、地域認識には経験的認識、説明的認識、印象的認識、課題的認識の 4 つの段階があることを明らかにした。

keywords: 地域認識, 方法論, 研究レビュー, 景観まちづくりワークショップ, インタビュー

1. 研究の概要

1.1 研究の背景

地域の景観計画策定やまちづくりにおいて、目に見える景観構成要素の物理的特色のみでなく、人々がその地域に対して抱く認識も「当事者性」として考慮することが求められている¹⁾。このような地域に対する人々の認識を意味する地域認識という言葉が包括する内容は様々である。視覚的認識に着目した景観イメージをはじめとして、地域の範囲や資源、記憶など幅広い。一般的に、認識とは心理学において知覚、記憶、想像、構想、判断、推理を含んだ広義の知的作用とされており²⁾、その対象となるものは無限である³⁾。そのため地域認識に関しても地域という様々な要素が存在する対象を扱うため、地域の中でも何についての認識に注目するかによって地域認識の意味する内容が異なってくる。

認識自体は目にみえるものではなく、頭の中のみ存在する。そのため、外部からその認識を理解しようとするときには、言語や行動といった何らかの表現を通して理解される³⁾。つまり、認識の問われ方やその時の状況によって主体が頭の中の認識を適宜選択し、表現することで人の認識は他者に把握され得るのである。そのため、地域認識を把握する際も、何らかの方法とそれに対する表現によってはじめてその認識を把握することが可能となる。

以上より、複雑で明確でない地域認識をより具体的に理解するために認識の抽出方法と得られる認識の関係に着目することが地域認識の議論において必要である。

1.2 研究の目的

本研究では、地域認識の抽出方法と得られる認識の傾向や特性を明らかにすることを目的とする。そのために第一段階として地域認識に関する既存研究の動向を明らかにし、第二段階として特定の地域において具体的な方法により抽出された認識の特性を明らかにする。まず、地域認識の抽出に関わる研究をレビューし、その方法と認識の内容の関係を把握する。さらに、地域特性把握を目的としてまちづくりの過程で多く用いられるワークショップ（以下 WS）と質的研究法の代表であるインタビュー法に注目し、岐阜県恵那市を対象とした認識の特性を把握する。

1.3 研究の方法と構成

3 章では、地域認識に関する既存研究の動向を明らかにするため、実在する地域を対象とした地域認識の把握に関する研究レビューを行い、その手法と認識の内容の関係を把握する。4 章、5 章では、特定の地域において具体的な方法により抽出された認識の特性把握に着目して分析を行う。まず 4 章では、抽出される地域認識の内容が多様である WS に着目し、過去に同じ主催者によって行われた複数の景観まちづくり WS の参加者によって提供される情報を地域認識としてその認識の特性をテキスト分析によって把握する。5 章では、地域認識を抽出する際の一般的な方法であるインタビュー法に着目し、過去に WS と同じ対象地で行われたインタビューにおける発話データを地域認識として 4 章での結果を踏まえながらその認識の特性を把握する。

2. 基本概念の整理

2.1 認識・認知・記憶に関する基本概念の整理

1) 認識と認知の概念整理

認識研究に関連する学問は幅広く、また長い歴史の中でその概念は形成されてきた。その中でも庄司³⁾は、認識とは何らかの表現を通してのみ他者に伝えられ、また、認識の対象は無限であるとし三層構造図を示している。さらに、認識そのものを構造的に把握することはできないため抽象度という尺度を用い、認識は具体的なもの、抽象的なもの、半抽象的なもの、の3つの段階に分けることができるとしている。三層構造図、認識の三段階を図 2.1 に示す。

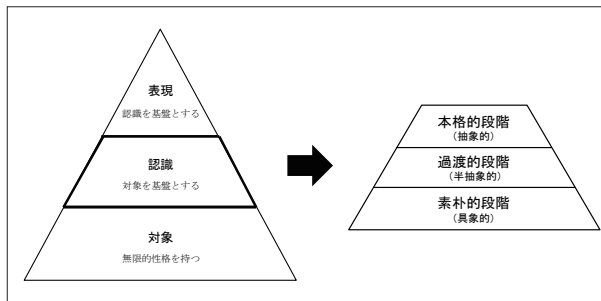


図 2.1 三層構造図と認識の三段階

2) 記憶の概念整理

心理学において記憶とは、物事を覚える過程（記銘）、覚えた情報をもっておく過程（保持）、覚えた情報を思い出す過程（想起）という3つの小区分の過程の総称であり、また、その過程における情報そのものを指す場合もある^{4),5)}。記憶の種類には、いくつかの種類があるが、言語や視覚イメージなど表現可能である宣言記憶は、エピソード記憶と意味記憶に分類される⁶⁾。記憶の分類を図 2.2 に示す。

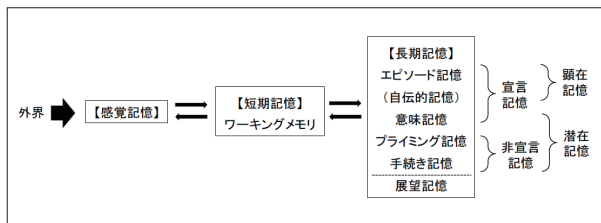


図 2.2 記憶の分類

2.2 研究の位置づけ

1) 既存研究の整理

心理学における認識や認知、記憶の基本概念は主に実験室的研究によって形成されてきた。しかし、1978年に Neisser, U. が生物学的妥当性の欠如を指摘したことで、日常記憶の研究についても研究が行われるようになり、日常の事象を対象とした認識や認知の研究も行われている⁷⁾。以下には都市空間や地域を対象と

した、認識の概念や把握方法に関する既存研究を示す。

① 認知科学の概念を援用した空間認知に関する研究

赤木ら⁸⁾は、認知言語学における経験基盤主義に基づき、現実場面における探索歩行を行い、言語を用いて都市空間の概念化を図っている。環境から得られた情報を記憶として再生させ発話により言語データを抽出し、M-GTA 法（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）を用いて「概念」を生成している。

戸田ら⁹⁾は、認知心理学における注意と記憶の理論的枠組みを援用し、商店街における店舗の認知特性の解明を試みるため、商店街を想定した様々な店舗を含む画像を刺激として SD 法心理実験を行い、因子分析を行っている。その結果、注意は主に色彩やコントラストが支配的要因であり、記憶の内容は店舗がもつ情報の量や複雑さが関係し、情報量が多く複雑で言語的な符号化が困難な店舗は画像的な符号化がなされ、情報量が少なく単純な空き店舗や住宅は言語的な符号化により記憶されていると推察している。

② 記憶や経験を用いた地域認識の把握手法に関する研究

槻橋ら¹⁰⁾は、東日本大震災以前の街の記憶を収集することによって、その土地に住む人々により形成され、共有されてきた地域空間の質的な特徴を含んで再構築し、地域社会再生のための空間的資源の情報として顕在化させる方法を確認することを目的に復元模型 WS を行い、住民の場所の記憶や街で思い出などを旗とつづやきシートにより抽出し、その内容と地域における場の関係性を考察している。

湯川ら¹¹⁾は、地域計画の策定に向けて要素抽出、構造の読解、物語の再編集があると考え、その初期段階である要素の抽出における新しい手法を提案している。住民個人の経験による地域に対する認識や印象、価値観を経験資源と定義し、住民が重要視する経験の価値を把握するための理論としてこれらを経験資源モジュール（EPM）と定義している。

岡本ら¹²⁾は、町の記憶の共有を目的に、大分県竹田市において住民の記憶の調査を行い、オーラルヒストリーのまちづくりへの実践可能性と方法論について住民の参加意識に着目して考察を行っている。ヒアリング内容を場所・環境と人の活動の観点から前者を水・川、道、建物、山・神社、竹田周辺、後者を遊び、商売・生業、くらし、祭り・イベント・事件によって分類し、傾向を考察している。

2) 本研究の位置づけ

以上のように認識や認知の対象が都市空間や地域である研究は行われているが、その数は多くない。

これは都市空間や地域を対象とした認識の概念が整理しきれていないためだと考えられる。そこで本研究は、人々が地域をどのように捉えているかという地域認識を探るための方法論に関する研究を意図する。

3. 地域認識の抽出方法に関する既存研究の整理

3.1 レビュー対象論文の選定

景観分野におけるレビュー研究は、篠原の研究¹³⁾や柴田ら一連の研究^{14), 15)}によって行われている。

本研究で対象とする論文は、査読付き論文として1985年～2014年において、土木学会、日本都市計画学会、日本造園学会、日本建築学会における論文集に掲載されている全論文を対象に目次閲覧と必要に応じて本文を参照する手順を用いて選定した。選定の際は、実験室的な研究を除き、実在する地域を対象に行った研究に限った。その結果、計118の論文を抽出した。各学会における論文集名と対応年を表3.1に示す。

表 3.1 対象論文集

学会名	論文集名
土木学会	日本土木史研究発表会論文集 (1985～1989)
	土木史研究 (1990～2002)
	土木史研究論文集 (2004～2008)
	土木計画学研究・論文集 (1984～2008)
	土木学会論文集D (2006～2010)
	土木学会論文集D1, D2, D3 (2011～2014)
日本都市計画学会	景観・デザイン論文集 (2006～2010)
	都市計画論文集 (1985～2014)
日本造園学会	造園雑誌 (1985～1993)
	ランドスケープ研究 (1994～2014)
日本建築学会	日本建築学会計画系論文報告集 (1985～1993)
	日本建築学会計画系論文集 (1994～2014)

3.2 レビュー対象論文の概要

抽出した論文の学会別の発表年を図3.1に示す。図3.1より、人々の認識把握により地域の特性を記述した研究は主に都市計画学会と造園学で多く発表されている。1990年以前から人々の認識を考慮した研究は行われており、現在も地域の特性を記述する方法として人々の認識把握を行っていることがわかる。

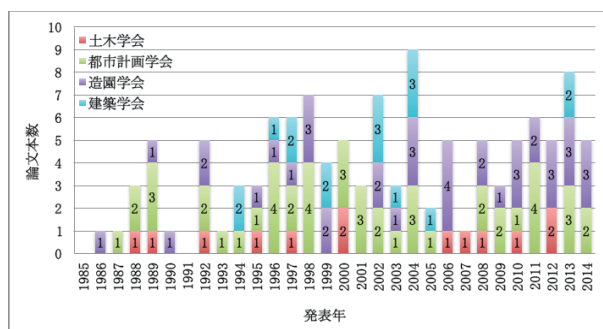


図 3.1 対象論文の学会別の発表年

3.3 地域認識の抽出方法と内容に関する分類・考察

1) 抽出方法と認識内容の整理

①抽出方法の分類

地域認識を把握するための抽出方法を、まず表現である「媒体」によって大別し、さらに地域認識の一次データの「抽出手法」に注目して細分類化する。

・「媒体」による分類

地域認識を抽出するために注目する「媒体」は、研究者が認識の主体に対して何らかの調査・実験を行う場合のもの(a.～c.)と、現前する主体ではなく資料を媒体とする場合のもの(d.)がある(表3.2)。

a. アンケートは、主体に記述してもらうこと、b. インタビューは、主体の発話によって、またc. 現場実験は、研究者がある指示をした上で主体に写真を撮影、会話などの行為を行ってもらうものである。これに対してd. 文献は、文学作品や紀行文など資料に記載された内容から認識を抽出するものである。

表 3.2 抽出方法における媒体の分類

記号	抽出方法	媒体
a.	アンケート	記述
b.	インタビュー	発話
c.	現場実験	行為
d.	文献調査	資料

・「抽出手法」による分類

また、抽出する媒体から認識を抽出する手法について整理すると11に分類された。それぞれの手法の概要とそこで注目されている主たる媒体を表3.3に示す。

表 3.3 抽出手法の種別

記号	手法	概要	主たる媒体
1	半構造化質問	質問に対し自由に回答する手法	発話・記述
2	構造化質問	質問に対して選択的に回答する手法	発話・記述
3	写真投影法	指示された内容に対応する風景写真を撮影する手法	行為
4	地点識別法	ある場所の写真を提示され、その場所に該当する箇所を地図上で示す手法	発話
5	ワークショップ	ワークショップに参加し、テーマに沿ってディスカッションを行う手法	行為
6	追跡調査	実験者が被験者の後方からビデオ撮影またはメモを取る手法	行為
7	スケッチ法	質問に対する回答をスケッチで描く手法	記述
8	圏域図示法	指示された特定の範囲を地図上に示す手法	記述
9	イメージマップ法	質問に対して該当する地図を描く手法	記述
10	連想法	質問に対して連想したことを発話する手法	発話
11	文献調査	文献調査を行う手法	資料

②認識内容の分類

次に、既存研究において把握・抽出しようとしている地域に対する認識を整理した。その結果、領域についての認識、風景についての認識、地域資源についての認識、そしてイメージについての認識の4つに大別することができた。

2) 抽出方法と認識内容の分類

以上を示した認識の抽出方法と認識の内容に着目して既存研究論文を位置づけた結果、表3.4のようにま

とめることができた。括弧内は該当する論文数を示している。複数の手法を用いている論文については主たる手法に着目し、複数の手法を並行して用いている場合のみ、1編あたりの手法数を複数としてカウントした。そのため、該当論文の総数は120となっている。

表 3.4 既存研究にみる抽出手法と認識内容の対応と傾向

認識内容	抽出手法	
領域 (12)	1. 半構造化質問 (1) 2. 構造化質問 (1) 6. 追跡調査法 (2)	8. 圏域図示法 (4) 9. イメージマップ法 (4)
風景 (46)	1. 半構造化質問 (8) 2. 構造化質問 (12) 3. 写真投影法 (16)	4. 地点識別法 (1) 7. スケッチ法 (4) 11. 文献調査 (5)
地域資源 (40)	1. 半構造化質問 (10) 2. 構造化質問 (11) 3. 写真投影法 (2) 5. ワークショップ (3)	7. スケッチ法 (2) 9. イメージマップ法 (1) 11. 文献調査 (11)
イメージ (22)	1. 半構造化質問 (3) 2. 構造化質問 (13) 3. 写真投影法 (1)	9. イメージマップ法 (1) 10. 連想法 (1) 11. 文献調査 (3)

3) 地域認識の抽出方法と認識内容の関係性に関する考察

表 3.4 より抽出方法における媒体の分類では、領域についての認識において資料を媒体として認識を抽出した研究がないことを除いて、いずれの認識内容についても4つの媒体によって抽出されていることがわかる。抽出手法による分類では、半構造化質問や構造化質問といった抽出手法は、いずれの認識内容を抽出する際にも用いられていることがわかる。また、地域資源を抽出しようとする場合、風景のような視覚的なものだけではなく、植物や生物といった自然のものから祭りや活動、経験といったソフトに関するもの、ハードに関するものと幅広く、それらを抽出する手法の中で特に網羅的に抽出できる手法としてワークショップが用いられていた。

4. WS における地域認識抽出の概要

4.1 対象 WS の選定

WS は、プログラム構成や複数の人々によって行われることなどから双発的で多様な発話や行為の展開が可能な方法である。その過程では、特定の認識に限定されず、幅広い内容の認識が表現されていると考えられる。そこで本章では、WS 参加者によって提供された情報を人々の地域に対する認識として捉え、その特性を把握することを試みる。本章は、筆者が所属する早稲田大学の景観・デザイン研究室によって継続的に開催されてきた岐阜県恵那市地域別景観まちづくり WS の中から分析に必要なデータが揃っている「大井“歴まち地区”WS」と「武並・三郷地域景観まちづくりWS」を分析対象とする。

4.2 対象地概要

岐阜県恵那市大井町は、平成 28 年 1 月 1 日現在、人口 13,309 人¹⁶⁾であり、恵那市全体で最も人口が多い町である。大井町の中心地には中山道が通り、現在も歴史的な町並みが残っている。また、中心地を離れた山間部には恵那峡や大井ダムが存在する¹⁷⁾。

平成 28 年 1 月 1 日現在、岐阜県恵那市武並町は、人口 3,186 人¹⁶⁾であり、岐阜県恵那市三郷町は、人口 2,497 人¹⁶⁾である。どちらも森林が大部分を占め、一部には豊かな田園が広がっている。また、現在西部地域では、リニア中央新幹線の計画、瑞浪恵那道路の計画といったインフラ計画がある¹⁸⁾。



図 4.1 大井町、武並町、三郷町の位置（左）
図 4.2 武並町・三郷町における各大字の位置（右）

4.3 対象 WS の概要

対象とする WS は、平成 25 年度に行われた大井“歴まち地区”WS と平成 26 年度に行われた武並・三郷地域景観まちづくり WS である。

大井町“歴まち地区”WS は、①まちの将来像を描く、②実現に向けた行動計画を提案する、③“歴まち”事業の活用方針を決める、の3つを目的として全4回のプログラムで行われた。各回 WS の日時、目的、内容、ファシリテーターを務めた主担当者の詳細を表 4.1 に示す。

武並・三郷地域景観まちづくり WS は、西部地域における景観まちづくり計画検討を目的として全4回のプログラムで行われた。第1回と第4回は全地区合同で行われたが、第2回と第3回に関しては、場所ごとに景観特性や地域の課題、まちづくり活動の現状などの違いが大きいことから、旧大字に該当する5地区ごとに WS を行っている。各回 WS の日時、目的、内容、ファシリテーターを務めた主担当者の詳細を表 4.2 に示す。また、旧大字地区について位置関係を図 4.2 に示す。

4.4 地域認識のデータ化

分析に使用するデータの対象は、大井“歴まち地区”WS では第1回、武並・三郷地域景観まちづくり WS では第2回において参加者である住民がまちあるき

を経て発見，再認識した地域の課題や魅力を WS 中に書き込んだ 6 地域（大井町・藤・竹折・野井・佐々良木・棕美）の地図である．具体的には大井“歴まち地区”WS は WS のニューズレター，武並・三郷地域景観まちづくり WS は報告書¹⁸⁾に掲載された地図を用いる．

WS において表現された地域認識をデータ化するために，地図に書き込まれた記述のテキストデータを用いてテキスト分析を行う．単語のみで記述されたものから文章で記述されたものまで全てをテキストデータとして扱うが，適宜，誤字脱字の訂正や内容を理解しや

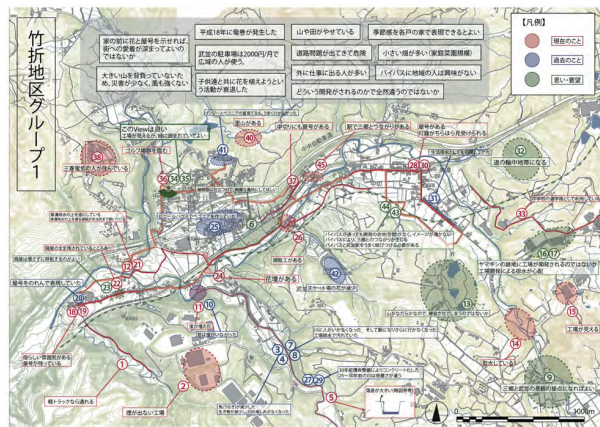


図 4.3 WS で作成された課題・魅力地図（竹折）

表 4.1 大井“歴まち地区”WS の詳細（注 1）

実施回 / 日時	目的	内容	担当者
第 1 回 2013. 6. 15 (土) 13:30～16:30	対象地の現状確認	大井“歴まち地区”を中心に設定したルートで写真撮影を伴うまちあるきを実施し，各グループで確認されたまちの現状を地域の魅力と課題，その他に分けながら地図上で共有した．	早大・PN
第 1 回ワークショップの宿題		範囲を決めずに各自改めて大井町内を歩いてもらい，気になったものを配布したインスタントカメラで撮影し，コメントを添えて郵送にて提出してもらった．	
第 2 回 2013. 8. 3 (土) 13:30～16:30	地区の景観資源と課題の確認・まちのビジョンの共有	宿題として提出された写真を全体で共有し，「特別な思いがある風景・場所・もの」にまつわるエピソードを語った．第 1 回での課題や提案を踏まえ，まちの目標像を議論した．	早大・PN
第 2 回ワークショップの宿題		「未来の大井町にすむ子供たちへ」と題して手紙を書いてもらい郵送にて提出してもらった．	
第 3 回 2013. 8. 31 (土) 13:30～16:30	まちのヴィジョン実現の為の行動計画策定	大井宿中心部の地図上で資源活用具体案を提案し，現在大井町内で行われている行事と上記の具体案を，担い手を考えながらまとめた．	早大・PN
第 4 回 2013. 10. 5 (土) 13:30～16:30	まちづくりの目標と具体的な活動のまとめ	WS の総括として，5 つのまちづくり基本方針を確認し，その基本方針に基づきながら，外部の視点に立ち，WS で出た意見や要望を実現させるまちづくりプロジェクトを提案した．	早大・PN

表 4.2 武並・三郷地域景観まちづくり WS の詳細（注 2）

実施回 / 日時	目的	内容	対象地区	担当者
第 1 回 2014. 10. 2 (木) 19:00～	地域の現状の理解と景観まちづくり WS の目的の共有	恵那市の景観まちづくりに関する情報提供の後，現地調査から把握した西部地域の景観の特色の報告を行う．その後，地区ごとに大判地図を見ながら，地域資源や課題などについて意見交換する．	全地区	早大
第 2 回 2014. 10. 25 (土) 13:30～ 2014. 10. 26 (日) 13:30～	地区の現状の確認と共有	各地区でまちあるきを実施し，地区の課題や資源を地図上で共有した．また，竹折と野井では風景とくらしを季節ごとにまとめ，藤と佐々良木では景観まちづくりの目標を立て，棕美では将来像を考えた．	三郷 野井 佐々良木 棕美 竹折 藤 武並	早大 日大 京大 PN 日大
第 3 回 2014. 11. 22 (土) 13:30～ 2014. 11. 23 (日) 13:30～	地区別にまちづくりの目標とそのための行動計画を議論	藤と佐々良木では魅せるまちめぐりルートを策定し，実用化のために必要なことを議論，竹折では駅の活かし方と目標像，実現に向けたアクションプランを議論，野井では定住・移住してくれる人向けシートを作成，棕のみでは守りの原則とアクションプラン，攻めの方策とアクションプランを作成した．	武並 三郷	PN 日大 早大 日大 京大
第 4 回 2014. 12. 13 (土) 13:30～	地区ごとの連携を探る	第 2, 3 回の各地区の成果を同一のフォーマットでまとめて発表し，相互に確認するとともにアドバイスや質問，連携できることを具体的に考えていく．	全地区	早大

すいようなテキストを補足として追加している．テキストデータは，1 事象を 1 つと数え，分析に用いる．また，内容は多様であるため，経験的認識，説明的認識，印象的認識，課題的認識の 4 つの認識の種別とさらにそれに付随する 12 の小分類，また 26 の認識対象の種別によって各テキストデータの属性を特定した．それぞれ表 4.3，表 4.4 に種別を示す．また，テキストデータと各種別の対応例を表 4.5 に示す．

表 4.3 認識の種別

大分類	小分類	大分類	小分類
A. 経験的認識	a. 現在	C. 印象的認識	g. 好印象
	b. 過去		h. 悪印象
B. 説明的認識	c. 現在の状況	D. 課題的認識	i. その他
	d. 過去の状況		j. 課題
	e. 知識		k. 要望
	f. 名称		l. 提案

表 4.4 認識対象の種別

I. 自然	II. 構造物	III. ソフト
(1) 山	(8) 橋	(18) 行事
(2) 川	(9) 道	(19) 祭事
(3) 水路	(10) 住宅	(20) 活動
(4) 田畑	(11) 店舗	(21) 生活
(5) 気象	(12) 施設	(22) 地域
(6) 植物	(13) 蔵	(23) 風景
(7) 生物	(14) 社寺	(24) 街並
	(15) 神仏	(25) 場所
	(16) 史跡	(26) その他
	(17) 建物細部	

表 4.5 テキスト分析の例（大井町）

A. 経験的認識		
経験の種類	テキスト	対象の種類
過去	昔は川で遊んだ	場所
B. 説明的認識		
説明の種類	テキスト	対象の種類
現在の状況	水が流れていない	水路
過去の状況	十月の例大祭は昔は大きな祭りであった	祭事
知識	うだつのある古屋家	住宅
名称	古田医院	施設
C. 印象的認識		
説明の種類	テキスト	対象の種類
好印象	線路沿いの景色がよい	風景
悪印象	子どもが少なくなってきたいて送り神の維持が難しい	行事
その他	狭い小さな道がたくさんある	道
D. 課題的認識		
説明の種類	テキスト	対象の種類
課題	御所の前にある阿弥陀堂を保存しなければならない	社寺
要望	小路川はどこに残したい	川
提案	中山道の水路にも水を流す	水路

4.5 単純集計

テキスト分析の結果を全ての WS と地域別で各々単純集計する。集計項目は、それぞれ認識の種別と認識対象の種別の 2 つである。

1) 全ての WS による結果

大井町、藤、竹折、野井、佐々良木、棕実の 6 地域全体の傾向を把握するため、6 地域の全てのテキストより集計し、認識の種別の割合を図 4.4、認識対象の種別のテキスト実数を図 4.5 に示す。

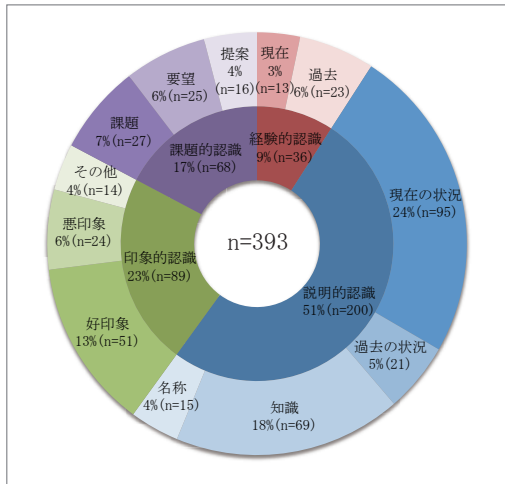


図 4.4 全ての WS における認識の種別の割合

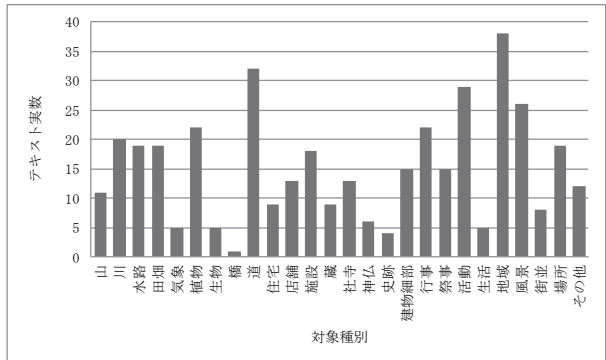


図 4.5 全ての WS における認識対象の種別のテキスト実数

2) 地域別の結果

大井町、藤、竹折、野井、佐々良木、棕実の地域別の特徴を把握するため、それぞれの地域の認識の種別の割合と認識対象の種別のテキスト実数を集計した。地域別の認識の種別の大分類のテキスト実数を図 4.6 に示す。

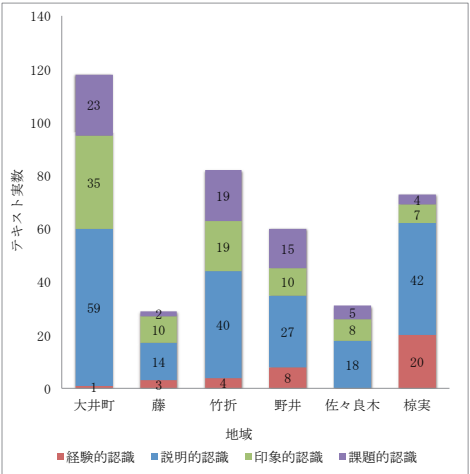


図 4.6 地域別の認識の種別のテキスト実数

4.6 小括

WS 参加者によって提供される地域認識は、経験的認識、説明的認識、印象的認識、課題的認識の 4 つの認識の種別と 26 の認識対象の種別によって解釈された。認識対象について今回の分析では 26 の種別に分類されたが、対象は無限であることを前提としており、対象地や分類のし方によって変化すると考えられる。一方、認識の種別は主体における認識の段階として捉えることができると考えられる。心理学においては、認識の三段階が提示されているが、対象が地域である場合その段階は、経験的認識を基盤とし、単純な説明で留まる説明的認識、そして対象が何であることを説明できる段階を基にその対象に対する印象が表現される印象的認識、さらにその印象を踏まえて要望や提案といった課題的認識があると考えられる。WS によって地域認識が抽出される場合、全体の約半数は説明的段階の認識が抽出されており、経験的段階の認識の抽出は全体の約 1 割に留まっていることが今回の分析によって明らかとなった。

5. インタビューによる地域認識抽出の概要

5.1 対象インタビューの選定

前章の小括を踏まえ、他の手法により抽出される地域認識についても認識の段階による整理ができるかを検討するために、質的研究法の代表であり、一般的手法であるインタビューによるデータの分析を行う。対象

は、前章で扱った大井“歴まち地区”WSの対象地である岐阜県恵那市大井町で筆者が2013年度に行ったインタビューデータとする¹⁹⁾。

5.2 対象インタビューの概要

1) 目的

対象インタビューは、住民が地域の眺めを見た際の想起特性を明らかにすることを目的として行っている。岐阜県恵那市大井町を対象として、住民に対するインタビューを行い、発話データから想起特性を明らかにしている。本章で用いる地域認識はこの発話データである。

2) インタビューの方法

対象インタビューでは、柔軟な対応が可能である半構造化インタビューを用い、眺めの写真を見せながら1対1のインタビューを行った。質問項目は、①眺めを知っているか、②眺めについて知っていること、③眺めにおける思い出、④眺めが大井町らしいか、⑤眺めについて思うこと・感じることを、の5項目である。

インタビューは、大井町内で2013年12月6日から12月9日にかけて計12名に行った。

5.3 地域認識のデータ化

インタビューによって抽出される地域認識をデータ化するために、発話内容をラベル化する。インタビュー用紙のメモは、質問項目①、④については選択肢による回答、質問項目②、③、⑤については発話内容の事柄を記載している。データ化する発話内容は後者の質問項目②、③、⑤についてであり、事柄ごとにラベルを付加し、データ化した。ラベル化に用いたラベルの種類を表5.1に示し、ラベル化の例を表5.2に示す。また、ラベル化されたデータを単純集計した結果を図5.1に示す。

表 5.1 想起内容の種別

記号	想起内容の種別
a.	意味記憶/環境の定位
b.	意味記憶/環境の変化
c.	意味記憶/環境の印象・イメージ
d.	意味記憶/環境の知識
e.	意味記憶/環境の要望・希望
f.	エピソード記憶/エピソード

表 5.2 ラベル化の例

インタビュー用紙におけるメモ	ラベル
うだつのあるところ	a
国会議員の人の家	d
市神神社がある	a
七日市でお茶を振る舞うのを見た	f
引っ越してきたとき、美濃にもうだつがあるけど大井にもあるのだと思った	f

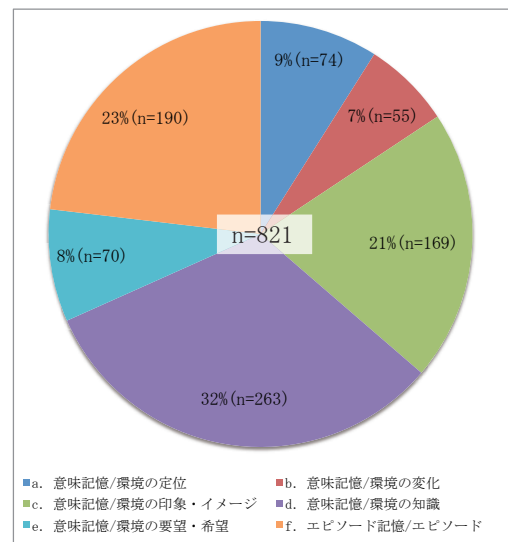


図 5.1 想起内容の種別の割合

5.4 認識の種別に着目した分析・考察

1) インタビューにおける認識の種別

4章で提示した認識の段階について考察するため、ラベル化した地域認識を5章の認識の種別と対応させる。まず、f. エピソードは経験的段階の認識と対応できる。a. 環境の定位、b. 環境の変化、d. 環境の知識はいずれも説明的段階の認識に対応できる。また、c. 環境の印象・イメージは印象的段階の認識、e. 環境の要望は課題的段階の認識にそれぞれ対応できる。想起内容の種別を認識の種別で捉えると表5.3のようになり、その割合を図5.2に示す。

表 5.3 想起内容の種別と認識の種別の対応

想起内容の種別	認識の種別
意味記憶/環境の定位	説明的認識
意味記憶/環境の変化	説明的認識
意味記憶/環境の印象・イメージ	印象的認識
意味記憶/環境の知識	説明的認識
意味記憶/環境の要望・希望	課題的認識
エピソード記憶/エピソード	経験的認識

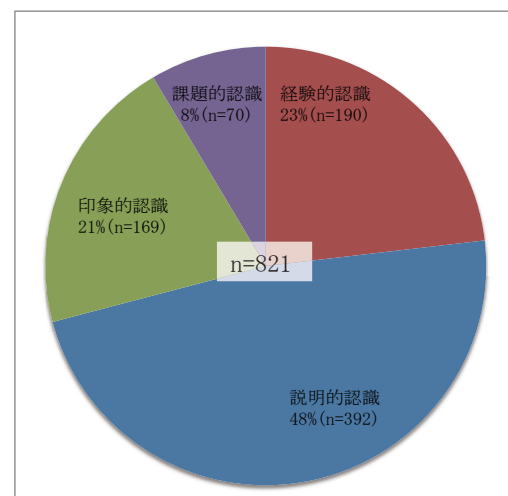


図 5.2 インタビューにおける認識の種別の割合（大井町）

2) 認識の種別に関する手法の傾向

インタビューの対象地である大井町に着目して、WS における認識の種別とインタビューにおける認識の種別を比較する。大井町での WS における認識の種別の割合を図 5.3 に示す。図 5.2 にとの比較より、説明的認識の割合はどちらの手法も全体の約半数を占めている。WS では経験的認識がごく僅かであるのに対して、インタビューでは全体の約 2 割を占めている。これは、インタビューの説明項目に眺めにおける思い出を聞いていることや、1 対 1 であるため個人的なエピソードを抽出しやすかったためだと考えられる。また、インタビューでは課題的認識が全体の 1 割弱であるのに対して、WS では全体の約 2 割を占めている。これは、WS という場が何か課題や問題を意識して開催されているため、参加者側もその意識に応えようとした認識が表現されやすいためだと考えられる。

5.5 小括

インタビューによって抽出される地域認識は、4 章と同様に 4 つの段階の認識によって解釈された。WS において表現された地域認識とインタビューによって抽出された地域認識を比較すると、その手法の特徴の違いにより得られる認識が異なる傾向があることが明らかとなった。

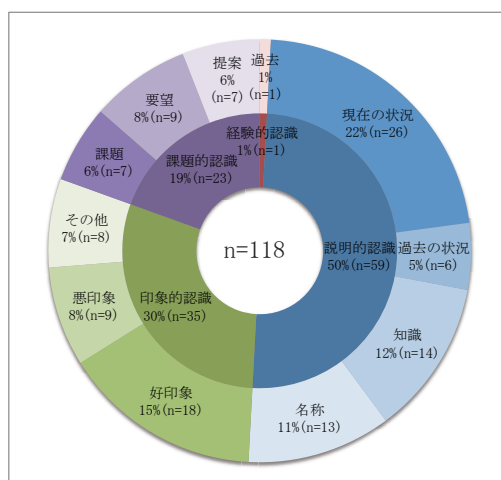


図 5.3 WS における認識の種別の割合 (大井町)

6. 結論

6.1 本研究の成果

本研究の成果を、以下にまとめる。

- ・地域認識の把握に関する研究レビューより、地域認識は 4 つの抽出媒体と 11 の抽出手法により抽出され、その認識内容は、領域、風景、地域資源、印象の 4 つに大別されることがわかった。

- ・WS における地域認識の抽出より、地域認識は、経験的認識、説明的認識、印象的認識、課題的認識の 4 つの認識の種別とそれに付随する 12 の小分類、また 26 の認識対象の種別により解釈できることが分かった。また、認識の種別は認識の段階と捉えることができ、その段階は経験的認識を基盤として、説明的認識、印象的認識、課題的認識を高次化しているということが示唆された。
- ・インタビューによる地域認識の抽出より、WS と同様に認識の種別で地域認識は解釈されることがわかった。また、WS とインタビューという手法の違いにより得られる認識の種別に傾向があることが示唆された。

6.2 総括

背景でも述べたように、人の認識は何らかの表現によってのみ他者に理解される。そのため、地域認識を把握しようとする側がどのような認識を把握しようとしているのか、そのためにはどの段階の認識を抽出するのがよいかを理解した上でそれに対応する方法を選択していく必要がある。

6.3 今後の展望

本研究は、基礎的研究に留まっているため具体的な方法による検証を続けていくことが必要である。また地域認識の解釈には、別のアプローチも考えられるため様々な観点からの基礎的研究を重ね、地域認識の概念をより明確化していくことが必要である。

〈参考文献〉

- 1) 山口敬太：風景の持続性に関する基礎的研究-景観の計画・運営における方法と課題-, 土木学会論文集 D3, Vol. 68, No. 5, I_21-I_33, 2012
- 2) 日本国語大辞典第二版編集委員会, 小学館国語辞典編集部：日本国語大辞典 10 第二版, 株式会社 小学館, 2001
- 3) 庄司和晃：認識の三段階関連理論, 季節社, 1985
- 4) 島井哲也, 池見陽 編：心理学・臨床心理学入門ゼミナール, 株式会社 北大路書房, 2006
- 5) 小野寺孝義, 磯崎三喜年, 小川俊樹：心理学概論 学びと知のイノベーション, 株式会社 ナカニシヤ出版, 2011
- 6) 太田信夫, 巖島行雄 編 日本認知心理学会監修：現代の認知心理学 2 記憶と日常, 株式会社 北大路書房, 2011
- 7) 高野陽太郎 編：認知心理学 2 記憶, 財団法人 東京大学出版会, 2011 (第 8 版)
- 8) 赤木徹也, 鯉坂誠之：認知言語学的アプローチに基づく都市空間の概念化に関する基礎的研究-既成市街地の住居系地区を対象として-, 日本建築学会計画系論文集, 第 77 巻, 第 679 号, pp. 2043-2052, 2012
- 9) 戸田鉄也, 平野勝也：商店街における空き店舗の認知特性, 土木学会論文集 D, Vol. 63, No. 3, pp. 426-434, 2007

- 10) 槻橋修, 山田恭平, 中村秋香, 平尾盛史:被災地における街の記憶の復元と共有手法に関する研究 - 岩手県大槌町野方地区における復元模型ワークショップ -, 日本建築学会計画系論文集, 第 78 巻, 第 699 号, pp.1129-1137, 2014
- 11) 湯川竜馬, 山口敬太, 久保田善明, 川崎雅史: 地域の「経験資源」の顕在化手法に関する研究, 第 51 回土木計画学研究発表会, 2015
- 12) 岡本章大, 吉武舞, 川添善行: 記憶の共有による風景の継承-オーラルヒストリーを手法として-, 景観・デザイン研究講演集, No. 9, pp.262-267, 2013
- 13) 篠原修: 景観研究の系譜と展望-風致工学から景観設計へ-, 土木学会論文集, No. 470, IV-20, pp.35-45, 1993
- 14) 柴田久, 土肥真人: 土木学会論文集, No. 674, IV -51, pp.99-111, 2001
- 15) 柴田久, 石橋知也: 目的別研究系譜図にみる景観論の動向について-98 年から 07 年を対象として-, 景観・デザイン研究講演集, No. 4, pp.324-333, 2008
- 16) 恵那市人口・世帯表 (住民基本台帳)
- 17) 恵那市 HP <http://www.city.ena.lg.jp/>
- 18) 西部地域景観まちづくり計画策定支援業務 報告書
- 19) 西村奏絵: 地域の眺めに対する住民の想起特性-岐阜県恵那市大井町を対象として-, 2013 年度 卒業論文
- (注 1): 「歴史的蓄積を有する地方都市における地域景観まちづくりの取り組み-岐阜県恵那市大井町でのまちづくりワークショップを通じて-」(第 49 回土木計画学研究発表会, 2014) におけるワークショップの各回の内容と結果に一部加筆
- (注 2): 18) の pp16-29 を基に作成

(外部発表記録)

西村奏絵・佐々木葉「地域認識の把握手法に関する研究レビュー」第 51 回土木計画学研究発表会, 2015 年 6 月 7 日発表